

「南京木屑」

尖閣諸島

菊 埼 威

今学期は動乱の幕あきであった。

石原東京都知事の尖閣諸島購入発言から始まり、政府による国有化決定にいたる一連の日本の動向は、8月中旬の杭州や成都での大規模反日デモをかきわきりに、9月に入り、中国全土で連日暴風雨のごとき反日デモを引き起こした。デモは、柳条湖事件の9月18日が近づきにつれ、ますます激しさをまし、特に青島や深で顕著に見られるような放火、略奪、暴行の類がくりかえされるようになった。ニュースで見るとかぎりでは、それはとうていデモと呼べるようなまやかしいものではなく、群集による焼き打ち事件であり、暴動であり、学生の中には、義和団事件を思いうかべたり、文革時の紅衛兵の暴行を連想した者さえもいる。青島ほ

どではないにしても、この近くでは上海や蘇州なども大きな被害があったらしい。ここにあるのは、理性的な批判ではなく、悪意にみちた行為である。

日本人とわかり暴行を受ける事件も頻発し、また日本語専攻の学生も殴られるなどという考えられない事件も起こった。日本車に乗っていただけで半死半生の目にあつた中国人もいた。卒業生のひとりには「中国人が中国人の生活を破壊するなんて……」と、電話の向こうで嘆いた。日系企業に勤める卒業生の中には、生産が減少し、工場の襲撃などをも恐れ、先行きの不安を口にする者もいた。上海の大学院で学んでいる教員が、友人から専門を日本語から他のものにしたらどうかと転科を勧められたと言つてきた。上海では国際

的な各種のイベントがよくあり、そのつど、日本語通訳のアルバイトをしていたが、それらがすべてキャンセルになり、大事な収入の道がとだえたと嘆いていた。日本人は「我是。国人」と言ったり、語尾は「……スミダ」と韓国語ふうに言った方がいいなどという笑えない話も聞いた。ある卒業生は周囲から「お前は裏切り者だ」と冗談半分に言われ、彼女の父親は会社で「お前の娘は、日本語で飯を食っている。お前の家には日本製の電気製品がいっぱいある」と嫌味を言われたという。

9月の始めから、CCTV（中国中央放送）の朝のトップニュースは釣魚島問題で、それが昼も晩もとなり、連日、日本の不法不当を報道していた。歴史学者なども登場し、江戸時代の林子平のあらわした私的地図を根拠に解説したりもした。特別めあたらしいことはないが、それがくりかえし放送されるのを見ていると、この国の情報戦略のしたたかさが見えてくる。市内の店頭には「抵制日貨 打倒小日本」の横断幕が（排斥日本製品、打倒日本、断固防衛釣魚島）の横断幕が張られ、愛国人民には割引セールがあるとまで書かれ、日本車には「日本車中国心」というステッカーが貼ら

れたり、ロゴタイプがみごとに中国国旗になっていたりする。ゴミ箱にさえ「保家。国 寸土不_レ_レ（国家防衛、一寸たりとも領土は渡さない）」などと書いたステッカーが貼られている。つまり、注意して目をくばればいたるところに愛国反日の文字があふれているということだ。領土なんかどうでもいいとか親日だ、などと言うものなら非国民になりそう。日本がかつて戦争に突き進んでいったときもこのようにして一色に染まっていたのかとあらぬ想像をめぐらしてしまう。そして今、そのただなかに自分がいる……。

卒業生が「外に出るな」「日本語を話すな」などと心配して電話やメールをくれた。現役生も、自分の将来を気にしながらも、「先生、大丈夫。私たちがいる」と励ましてくれる。それを、ありがたいことと受けとめつつも、周囲の空気が冷えていくように感じてしまう。学内を歩いていても、食堂で学生と話をしているも、周囲の学生のこちらを見る目を妙に意識してしまふ。以前は暖かくやさしく聞こえた彼らの「リーベン（日本）」と言う語も、突き刺さるように聞こえてくる。もちろん、なじみの自転車屋のおやじや食堂・売店のおじちゃんおばちゃん、それに、早朝いつも龍王山で

会う太極拳のじいさんもいつに変わらずにこやかにあ
いさつを交わしてくれる。また学生といっしょにいる
ときは、いつも楽しいひとときを過ごす。だが、ひと
りになると、一連のことを意識し、意気が沈みこんで
いく。かのエリート官僚、太田豊太郎の心境もかくや
などと、くらべるのもおこがましいが、ふと思つてし
まう。学生の顔を求めて学内を走りまわるのもそんな
時で、また電車でもバスでも、人ごみの中にいるとき
は声をひそめ、口を閉ざし、萎縮している自分がいて、
まるで滑稽な一人相撲をとっている。

16日に教え子の結婚式で張家港へ行つた。そのとき
のことだが、式場のホテルのロビーで卒業生数人と話
をしていると、そばにいた数人の若者が聞き耳を立て、
われわれに日本人かと聞いてきた。卒業生が中国人だ
と答えると、私を見てまた問う。卒業生がわたしたち
の先生だと答えると、何やらいろいろ彼女たちに話し
かける。たびたび私の顔を見ながら「小日本（シャオ
リーベン）」の語を発する。彼女たちがいやな顔をし
て、先生行きましよう、その場を離れ、「いやな奴
ら、彼らは不良です」と言う。たしかに、ソファに寝
そべったり、テーブルに足をのせたり、タバコの灰を

撒きちらしたりで、お世辞にもいい態度には見えなかつた。彼女たちにどんな話だつたのかと聞いても、気にすることは無いと言つばかりで詳しいことは教えてくれない。あまり芳しい話ではなかつたのだろう。いっしょにすることで彼女たちがいやな思いをさせたかと思つとそれもまた氣うつ種になる。

「小日本」という言葉は日本や日本人への侮蔑語と聞いていたが、今までまったく気にしなかつた。以前グラウンドをジョギング中に、バドミントンをしている学生がシャトルを打つ時、「小日本」「日本鬼子（リーベンクイズ）」というのを聞き、一瞬ぎよつとはしたものの、「えいつ。やつ」くらいの掛け声だろうと思つていた。それが面と向つて発せられると、やはり氣になる言葉になる。その2日後に、QQというチャット画面で、卒業生が「小日本」と書いているのを見た。在学中も卒業してからも親しく交流している学生であつただけに、その衝撃は大きかつた。胸の内がすつと冷え、いつきに力が抜けていった。その夜は読書会であつたのだが、教室にむかう足どりはおもかつた。おそろしく顔も暗い顔をしていたであろう。のちに授業時に、「小日本」を使うのかと聞いてみたら、なんとほとんど

どの学生が今はともかく、むかしはよく使っていたと答えた。まわりの大人がよく使うので、さほどの意識もなく使っていたという。それを聞いて、先の卒業生の件は少しは気が軽くなったものの、しかしそれだけ日常語化しているわけで、この国の人々の日本への反発には根深いものがあると思ひ知らされたしだいだ。もっとも、大日本帝国や軍国主義日本のことを考えると、「小日本」でおおいにけっこうだという思いもしてくる。自身を省みればまさしく「小」だが、世の中には「大」の人もいるからやっかいだ。

心なごむことがあつた。ある学生が「小日本」と書いたとき、私の顔がすつと浮かび、すぐに書き換えたそう。現役の時、生徒の問題行動を抑制するには、親や教師の顔を思い浮かべさせるにかぎると思ひ、できるだけそういうつながりを持つていたが、これもおなじで、人と人とのつながりが、たがいの誤解をとき、理解を深めていくのかもしれない。日本で働いている卒業生が、こういう時だからこそ、自分の思ひを率直に語っていきたいと言ひ、また周囲の日本人が私のことを守ってくれると言つたとうれしそうに話してくれた。こういうことから見ると、相手を知つて

いるかないか、他者を理解しようとするかしかないかに事の成否はかかっているのだろう。

学期初めに、この問題を避けてはとおれないと思ひ、何度か話し、かれらに考えをまとめてもらつた。4年生およそ160人の意見がでそろつた。ひとりだけ日本の主張の根拠をしらべた学生がいて感心した。また両国どちらの主張がただしいのかわからないとした学生も数人いたが、総じて釣魚島は中国固有の領土であると信じてうたがわず、日本の国有化政策は中国に対する不当な挑発行為で両国の信頼関係をそこねるものだど批判している。中国が弱いからこうなるので、強くならなければならないと大国化を志向する意見も多く、なかには戦いあるのみという勇ましいものもある。しかし、全体的にはひじょうに冷静かつ抑制的に考えられている。日語科の学生ということもあるが、みんなとまどいつつも両国の友好発展をねがい、平和的解決をのぞみ、したがつて反日デモの暴行をきびしく批判している。なかに、今回のデモは反日に名を借りた現代中国の格差社会や閉塞性への不満の爆発だと述べ、釣魚島より格差是正など内政問題に取り組めというのがあり、印象的であつた。

わたしは、その動機や展望がどうであれ、今の反日の空気の中で日本語を学ぶ彼らの勇気や深い思いに強く心を動かされた。いずれにせよ、日本にいる中国人や中国にいる日本人、そして日本で中国語や中国文化を学んでいる日本人や中国で日本語や日本文化を学んでいる中国人、そういう二つの国にまたがる多くの人々が安心して生活し、希望に燃えて学ぶことのできる環境こそが長い友好関係の歴史をもつ両国にふさわしい環境であると痛切に思うのである。

つぎに、8人の意見のそれぞれ一部を原文のまま紹介する。

先日、トヨタを中心に日本産の自動車が壊される事件があった。多くの人は愛国を名目にして国家の友好を壊す。本当にがっかりさせる。……………中日両国の中で、少数の違法分子は人々の心を惑わすことをたくらむ。私たちは是非をはっきりさせる能力を持たなければならぬ。多数の中国民衆は友好だ。それとともに、争いの発端を避けるように中日双方は事実の真相を明らかにすることを願う。……………私たちは愛国しないのではなく、盲目的に愛国しないのだ。(S女)

中日関係はいまますます厳しくなってきた。私は中国人として憤るべきだが、とても怒ることができない。なぜなら、私は日本語を専攻し、中国と日本の架け橋になりたいのだから。……………私は困っている。しかし、このときは困るところじゃない、中日友好のために、私たちは努力しなければならない。責任を負うべきだ。中日関係には大きな問題があり、私の力も弱いから、でも、「千里の道も一歩から」……………私は少しずつ頑張りたい。だって中国と日本の未来は私たちの肩にかかっているからだ。(3年J女)

近頃、魚釣島問題をめぐっていろいろな紛争が起きた。中日友好関係も急速に冷却し、両国民はそれぞれの立場で、どちらも一歩退こうとしない。せつかく構築した中日友好関係が崩れていくことは実に残念だ。歴史によると、魚釣島は間違いなく中国の領土で、……………我が国は近年、魚釣島を取り戻すためにずっと取り組んでいる。このような努力は正当で正義でもあるにもかかわらず、最近中国ではやっている反日デモはまわがっている。暴力を含むデモは野蛮人の行為に過ぎない。このような行為はさらに誤解を招くだけだ。やる

べきことはいったい何かは今私たちが考えねばならないことで、平和や主権は暴力や戦争で手に入れるものではないと私は確信する。(Y男)

世界はどこかの国を中心として回っているものではない。しかし、一つの国の国民にとっては常に自分の国の利益からすべてのことを考えだすきらいがある。釣魚島についても同じだ。しいて言えば、われわれの観念はたぶん生まれた瞬間にもう決まったのだろう。私は、中国人に生まれた以上、もちろん、釣魚島は中国のものだと主張している。日本人がこの問題について一歩も譲りたくない立場も理解できないわけでもない。ところで、中国国内のテレビを見るとすこし驚く。民間の高揚した反日情緒に反して、公式なメディアはごく冷静で、淡々たる態度を持つていっている。先日もCCTVで専門学者とか官員がみな落ち着いて討論していた。問題は一時に解決されないとわかった以上、今は争いを放っておき、共同開発とかに着眼した方がいいとも主張しているのが彼らの常識である。どうやら高層にある方々は柔軟に考えているようだ。この態度は日本方面とは違ったようだ。日本は政党や

選挙の利益のために勝手に領土争いを利用するきらいがあると思う人も少なくない。(X女)

釣魚島をめぐる騒動は度々発生し、中日関係に影響を及ぼしてきたが、今日ほど収拾が困難になったことはなかった。ヤフー・ジャパン、朝日新聞などの日本のウェブサイトに登録してみたが、できずじまいだった。緊迫した中日関係をしみじみと感じている。

最近時々こう思うのだ。我々のような日本語を専攻する学生はこれからどうなるのだろう。見通しが甘いのか。しかし、よく考えてみれば、最初、私が日本語を選んだのは、仕事のためではない、私は日本語が好きだったからだ。これから中日関係がいかなるにしても、私は日本語を習いつづけるのだ。

1972年の中日国交正常化後、中国の指導者が様々な努力を重ね、日本の歴代首相も中日関係の大局を把握するゆえ、中日関係は一応スムーズに進んできた。どうして釣魚島問題について、中日政府は共同発展を目指すために慎重に交渉することができないのか。これ以上おたがいに争うのは、どちらが利益を得るのか。私にはわからない。(Y女)

今年は中日国交正常化40周年である。歴史を振り返ると、辛いことや幸せなこと、悲しいことや嬉しいことは数えきれない。それぞれは歴史の流れの中で色が褪せて、ぼんやりしている。残ったのは仄暗い感情だけだ。

感情は弱いものだ。一度傷付いたら、敏感になつてしまう可能性が高い。二人はお互いに緊張して、二度と裏切られないように慎重な態度で相手と付き合うのだ。恋人にとつて、この情況は致命的である。もしかすると、二人の間の関係はずっと悪いところまで進んでいるかもしれない。中日両国は、今、信頼を失つた恋人みただと私は思う。

……好きと言うのに、何の行動も見えなかった。なぜならお互いに心を開いて相手の気持ちをちゃんと酌まないわけである。中日両国政府は各自の誠意をもつて、成熟な姿勢で話し合うべきだ。争つた双方ともに痛みを受けることは誰でも見たくないのだ。(Y女)

最近、反日デモが次々と行われていた。聞くにも堪えないスローガンを掲げたり、日本の国旗を破つたりしていた。日本人学校の運動会も延期を余儀なくされ

た。子供にさえ影響が出始めたのだ。

日本が無理な方法で釣魚島を買い取つて国有化しようとした行為はなかなか納得できない。得体の知れぬ土地領有権は国際的にまったく認められないでしょう。とは言え、今回、中国側の反応はなんか違つたような感じがした。江戸の敵を長崎で討つように、昔の恨みを今回の事件に無理に当て嵌めて、今までたまつた怨恨を晴らそうとしていた。それと同時に、政府は本格的な姿勢を見せないばかりでなく、不能につながる恐れがあり、視線を避けるため、そういう過激なデモに拍車をかけるのだ。釣魚島問題を解決しようとするなら、事件そのものに策をめぐらさなければ、的を射られないに決まつている。(M女)

昔むかし、アジアという村には友達が二人いた。一人は豊かな中国、他は謙譲の日本である。千年以来、中国が強くて平和を愛するゆえに、二人の関係は大体よかつた。百年前に西洋の略奪者が村を侵略した。中国と日本は西洋から先進的な技術と思想を学んだ。中国が弱くなるとともに、日本が強くなつたが故に、中日戦争が発生した。掌中の珠としての魚釣島はその時

中国と別れた。ひいては、中日戦争のせいで、二人は今でも真の友好関係を回復しない。尖閣の北に日本がいる。魚釣の南に中国がいる。この島は二人のひびである。……両国は一色触発の危険な状況に陥る。これは両国の人民も見たくない状況だ。和すれば則ち共に利し、戦えば共に傷つく。しかし領土主権の面で、どちらも一步を譲らない。……周恩来総理は「争議はさておき、ともに開発する」と言った。さらに言えば、一方の島を皆の島になつてもいい。島で中日友好記念館また文化交流館というような建物を建てたり、周辺を共同開発海域にしたりすることは絶対役に立つ。これは君の尖閣、僕の魚釣である。両国の和平島になることを期待する。尖閣の北に日本がある。魚釣の南に中国がある。この島は平和の紐帯である。(F男)

(きくさき たけし・南京在住)

「近いうちに……」

最近の日本の政治家の言葉はまことに貧困である。言葉が貧困であるのは、政治が貧困だからだ。政治には駆け引きが必要であることは否定しないが、相手の揚げ足取りに終始している感がある。特に民主・公明の「論争」は論争にもなっていない。こゝとに議会の解散がらみの「近いうち」がどうのこうのとまことに貧困極まる。

加藤周一の『日本文学史序説補講』(ちくま文庫)に歌舞伎とシエクスピアの劇を比較した話が載っている。シエクスピアの劇ではローマの民衆を説得し煽動するために、感情的な二人のあいだだけで通じる言葉でなく、普遍的な言葉でもって弁論術を駆使して説得している。例えば「諸君」という具合に呼びかける。歌舞伎では「何とかさん」と言つても「諸君」とは言わない。市民を説得するには論理的・合理的でなければならぬのである。

所詮は民衆不在の密室での談合だけに、話そのものが「感情的な二人のあいだだけで通じる言葉」のやり取りで、普遍的にも論理的にもなりえないから、最後は言ったの言わないのとの不毛の言い合いになるのだろう。

(大滝)